



万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
〒228-8520
神奈川県相模原市麻溝台2の1の1 北里大学東病院
TEL : 042-748-9111 FAX : 042-745-5582
発行者：比企能樹
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
広報担当委員・村田宣夫（埼玉医大
総合医療センター外科）
E-mail : 03nmura@saitama-med.ac.jp
印刷：株式会社 dig TEL:03-3551-3060
年2回発行1995年4月創刊

支部長挨拶

38th World Congress of Surgery ISS/SIC

万国外科学会
日本支部会長
比企能樹
(北里大学東病院)

分厚い歴史と文化の積み重なった敷石を歩き、地下鉄を乗り継いでドナウ川を渡ると会場の学会センターに到着します。タクシーでも然したる距離では無いけれど、欧州の先生方は地下鉄と自前の足でよく歩き、ワインとビールで美味くてヴォーリュームたっぷりのワイン料理をペロリと平らげる、全く彼らはエネルギーです。

会場には、公的な出席者名簿によると315人といわれる日本人会員が溢れていきました。開催直前の学会事務局からのメールによりますと日本からのabstractは319件に上ったということです。今後更に新進気鋭の日本支部会員諸氏が、陣容、内容共に発展に努められ、その学問の成果をISS/SICの学会の舞台で発表して行って頂きたいと願っております。因みに国際委員会における報告によると、本年のわが国の新入会員は49名で最多とのことでした。

8月15日の開会式がヨハン・シュトラウスの名曲をバックに厳粛に行われ、わけても石川浩一先生が名誉会員に推挙されたことは、われわれ日本人会員にとっても大変光栄な事ありました。先生ご自身は、遠隔地のため残念ながら直接お受けになれず、壇上では日本代表の私に賞状と数々の記念品が手渡され、その場で先生の愛弟子の跡見裕教授にこれを託しあ手許に届けて頂きました。今回の推挙は、ひとえに1977年に京都で行われた本学会における先生の功績を、ISS/SICが高く評価したものであります。

さて、学会開催に先立ち行われた国際委員会には、出月康夫理事、山川達郎日本支部事務局長、および日本代表の私の3名が出席致しました。

ここで、この総会まで本学会のために力を注がれた前会長出月康夫教授、会長Prof.A.R.Brown、次期会長Prof.S.A.Wells並びに事務総長Prof.Ruediから新たな首脳部に、各々の任務がバトンタッチされました。即ち新たに前会長としてProf.A.R.Brown、会長にSir.P.J.Morris、そして事務総長の役職にはProf.R.Siewertが就任しました。

これに引き続き理事の交代が発表され、今回任期満了で2名の新理事が理事会で選出された旨の報告がありました。即ちメキシコのProf.J.Cervantesと、日本から私であります。本学会の理事は、所属する国代表というのではなくグローバルにみて地域的分布やその国の本学会に対する貢献度等が考慮されて決められます。その点で日本の会員増強に尽力された幹事の皆様のお力によって、今回理事の席が得られたとも言えます。特に今回は激戦で、その際出月康夫前会長の絶大なお力があったことを記しておきましょう。

ついで2007年度のISW開催候補地について議題がのぼりました。11カ国が立候補しましたが、今回の国際委員会に提示されたのはAdelaide (Australia)、Montreal (Canada)、Havana (Cuba)、Seattle (USA)に絞られていました。同席上、今後の予告として山川日本事務局長より、2009年のISWに向けて京都開催を立候補したい旨をアナウンスして頂き、会場には日本支部会員諸氏によってポスターとパンフレットが配布されアピールしました。

学会第3日、18日の午前に行われた総会において2007年の本学会（ISW）開催候補地の投票が行われ、その結果Adelaideが1位、Havana以下3カ国が僅差で続いているとの報告がなされました。開催地決定は学会の会則により、まず総会に出席したactive members全員による投票結果を、翌年3月の理事会で最終的に決定される仕組みになっています。

従って、日本が2009年にむけて誘致を考えているのですが、これには2001年のベルギー大会の総会での投票で高得点を得る必然があります。従って、会員諸氏には一人でも多くの方が2001年の総会に出席し、一票を日本開催のために投じて頂かなければなりません。何卒、ニュースレターその他学会誌により情報を得て、揮ってベルギーの学会（ISW2001）に参加して下さい。

そのISW 2001の学会は、本学会創立100年記念となり、誕生地ブリュッセルに帰ります。是非揮って参加されるべく、今から御準備をお願い致します。



山川達郎日本事務局長と石川浩一名誉会員への表彰盾を持つ比企能樹日本代表

万国外科学会理事を 終えるにあたって

埼玉医科大学総合医療センター
外科教授

出月康夫



ウィーンの第38回World Congress, International Surgical Weekから戻ってすでに2ヶ月になる。今回の学会を最後に理事会からも完全に解放され、ほっと一息ついたところである。

私がISS/SICにActive Memberとして初めて参加したのが、1983年。ISS/SICのWorld Congressには、パリ、トロント、ストックホルム、香港、リスボン、アカブルコ、ウィーンと計7回、演題を発表し、また座長などを務めさせていただいた。またこの間、日本支部の支部長、学会のCouncilor、President-elect、リスボンのWorld CongressではCongress President、1995年～1997年にはISS/SICのPresident、1997年～1999年にはISS/SIC FoundationのPresidentを務めさせていただいた。これらは私にとってこの上ない名誉な事であったが、これもこれまで数々の実績を築いてこられたわが国の諸先輩、日本支部の会員の先生方の御指導と御支援の賜物であったと改めて御礼を申し上げたい。

国際学会では、これまで国際胆道学会(International Biliary Association)、国際内視鏡外科学会連合(International Federation of Society of Endoscopic Surgery)、国際外科学会連合(International Federation of Surgical Colleges)などでも役員を務めてきたが、何れも理事や副会長としての経験であり、またISS/SICとは学会としての歴史も規模も格段の違いがあり、伝統のあるISS/SICの会長や役員は私にとってはとても大きなストレスであった。

特に会長としての実務を前任のMichael Trede教授（ドイツ）から引き継いだ時には、香港でのWorld Congress, International Surgical Weekで約4000万円の赤字が出た事が判明し、学会の経理はそれまでの学会の財産を全て吐き出しても危機的状況にあり、その建て直しをどうするかが最大の課題であった。永年にわたってISS/SICの経済的、精神的支柱であったMartin Allgewörn事務総長（スイス）が退陣され、代わってThomas Ruedi教授（スイス）が事務総長に、また会計理事にはOve Farnebo教授（スエーデン）が就任された。学会の経済的基盤を建て直す為に、それまで慣例的に行われていたWorld Congressへの招待演者などに対する旅費、宿泊費などの支給を一切廃止し、また会長、理事などの役員も全て自前で参加する事が理事会で決定された。これらのWorld Congress, International Surgical Weekの運営への不満からCICD(国際消化器外科学会)、現International Society of Gastroenterological Surgery)がWorld Congress, International Surgical Weekへの全面参加を取り止めるなど大きな出来事が相次いだ。

会計担当理事のFarnebo教授の厳正な予算運営と会員数の増加、リスボン大会、アカブルコ大会の成功で経済基盤はその後4年間でほぼ従前に復し、ようやく安定性を回復したところであるが、これらの点については日本支部の会員数の増加、日本からのWorld Congressへの多数の外科医の参加が大いに貢献してきた事は言うまでもない。

外科の最大の領域を受け持つISGEがWorld Congress, International Surgical Weekへの全面参加を取り止めている事は残念な事であるが、現在R.Siewert教授（ドイツ）（Ruedi教授が退任された為、その後を引き継いで現事務総長）が中心となって消化器外科領域のISS/SIC内での再編成を精力的に進めている。

World Congress, International Surgical Weekの開催地の決定は大変に難しい。御記憶の方も多いと思うが、去る8月にウィーンで行われた第38回World Congress, International Surgical Weekは本来はバーミンガムで開催される事になっていた。この決定がその後急遽覆される事になったのは、イギリスの高額な消費税(VAT・17.5%)など経費の点でバーミンガムでの学会の運営に問題がある事が判明した為である。そこで理事会でバーミンガムの取り消しが決定されたのであるが、イギリス支部への説明は大変難しく、いろいろなやり取りがあった。結局、香港での失敗を繰り返すわけにはいかないと言う事で最終的にウィーンへ変更されたのであるが、この為に白熱した議論が繰り返し理事会で行われた。不十分な英語力で、会長として2日間にわたって朝から晩まで、紛糾する理事会の司会を続け、調整する事は、実際のところ私にとって大変な仕事で、終わっ

(2頁へづく)

(1頁右下より)

てホテルの部屋に戻ると本当にくたくたであった。米国の議会運営のテキストであるRobert's Rulesを一通り勉強したつもりでも、咄嗟には独特の言い回しの会議英語が出てこなかつたり、冷や汗も大いにかいた。寛容に、また暖かく御支援をいただいた理事会の各國の同僚のメンバー、事務局長のVictor Bertschi氏、Chris Stoltz氏には大変に感謝している。

この数年間で日本支部の会員が倍増した事は、ISS/SICの中でわが国の発言力を大いに高めている。またWorld Congress, International Surgical Weekでのわが国からの参加者の大活躍も特筆すべきであろう。英語力に多少のハンディキャップはあると言え、わが国から出される抄録の質は高い。採択率は毎回段々である。最近は司会者として御活躍いただいている先生方も増えている。学会の機関誌であるWorld Journal of Surgeryへのわが国からの掲載論文数も増加しているし、またEditorial Boardには、阿部令彦先生、高木弘先生、馬場正三先生、戸部隆吉先生、それに小生の5人が名を連ねて査読を担当し、また特集企画にも参加している。WJSのImpact factorは最近急上昇しており、すでにAmerican Journal of Surgeryを抜いて、外科一般誌の中では第4位に躍進している事は御承知の通りである。これについても日本支部の会員の先生方のお力が大いにものを言っている事は確かである。

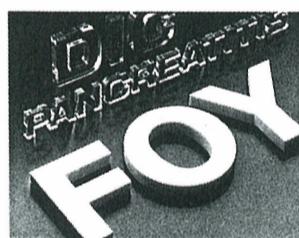
今回のウィーンの学会で各国から推薦された多数の候補者の中から石川浩一東大名誉教授が理事会の全会一致で名誉会員に推された事は、後輩の一人として大変に嬉しい事であった。故斎藤漠先生と石川浩一先生のお二人の名誉会員が日本支部から生まれた事になる。外科学への貢献、ISS/SICへの貢献から考えると遅すぎた感もあるが、誇らしい事である。

色々な面でISS/SICの中での日本の発言力は強くなっている。京都でISS/SICの第27回総会が開かれたのは1977年の事であるから、すでに22年が経過している。そろそろWorld Congress, International Surgical Weekをわが国に再び誘致しても良い時期であろう。

今年からCouncilorとして理事会に加わられた比企能樹北里大名誉教授や日本支部事務局長の帝京大山川達郎教授を中心に日本支部としても本格的に誘致活動を始めてはいかがなものだろうか。

ストックホルムでのWorld Congress, International Surgical Week以来ほぼ10年間にわたって理事会に席を置いてきた。私なりに努力をしたつもりであるが、いろいろと御期待に添えなかつた事も多く、内心忸怩たるものがある。今後は比企先生が理事として日本支部、ISS/SICの為に大いに活躍して下さるものと信じている。会員の一人として日本支部の発展と、ISS/SICの一層の発展を心から祈るものである。永い間の御指導、御支援に対し心より御礼を申し上げる。

(1999年10月)



蛋白分解酵素阻害剤

注射用エフオーワイ®
注射用メシル酸ガベキサート

- 効能・効果 ①蛋白分解酵素(トリプシン、カリクレイン、プラスミン等)逸脱を伴う下記諸疾患
急性肺炎、慢性再発性肺炎の急性増悪期、術後の急性肺炎
②汎発性血管内血液凝固症

薬価基準収載

DICに

蛋白分解酵素阻害剤

注射用エフオーワイ500®
注射用メシル酸ガベキサート

- 効能・効果 汎発性血管内血液凝固症

薬価基準収載

禁忌 (次の患者には投与しないこと)
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

■用法・用量

1. 膜炎は通常1回1バイアル(メシル酸ガベキサートとして100mg)を5%ブドウ糖注射液又はリンゲル液を用いて溶かし、全量500mLとするか、もしもあらかじめ注射用水5mLを用いて溶かし、この溶液を5%ブドウ糖注射液又はリンゲル液500mLに混和して、8mL/分以下で点滴静注する。
(1)原則として、初期投与量は1日量1~3バイアル(溶解液500~1,500mL)とし、以後は症状の消退に応じ減量するが、症状によっては毎回1~3バイアル(溶解液500~1,500mL)を追加して、点滴静注することができる。
(2)症状に応じ適宜増量。
(3)注射用エフオーワイのみ)

2. 汎発性血管内血液凝固症には通常成人1日量メシル酸ガベキサートとして20~39mg/kgの範囲内で24時間かけて静脈内に持続投与する。
(注射用エフオーワイ500共通)

■使用上の注意

1. 重要な基本的注意 まれにショックがおられることがあるので、十分な問診と救急処置のとれる施設を行ひ、投与にあつては観察を十分に行い、血圧低下、発赤、発熱、不快感、嘔吐等の症状があつた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行ふこと。2. 効副作用(エフオーワイ)副作用によるもの

3. 高齢者への投与 一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。4. 妊婦・産婦・授乳婦等への投与 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には大量投与を避けること。(大鼠100mg/kg/11投与:マウスに胎児体重の増加の抑制が認められている。) 5. 運用上の注意 (1)投与と速効点滴静注する場合、投与速度が増加すると血圧が低下することがあるので、メシル酸ガベキサートとして体重1kg当たり毎時2.5mg以下とすることが望ましい。(2)投与時:薬液が血管外へ漏れると、注射部位に硬結、壞死を起こすことがあるので、薬液が血管外へ漏出しないよう注意すること。また、血液滞留が起こりやすいので太い血管上に投与すること。(3)調剤時: (1)溶解後はなくなく速やかに使用すること。2)他の劇作用利尿剤(尿崩剤等)と配合した場合に、泥濁等の結合変化を起こすことがあるので注意すること。

●詳細は注射用エフオーワイ、注射用エフオーワイ500 各々の添付文書をご覧ください。

製造販売元 小野薬品工業株式会社
ONO 小野薬品工業株式会社

特別寄稿

第22回万国外科学会の思い出

奈良医大名誉教授

白鳥 常男



1967年に8月上旬から10月下旬にかけて、小野慶一先生(弘前大学・大内外科)と田中直樹先生(慈恵医大・大井外科)と三人で、第7回国際医用電子生体工学学会(於ストックホルム)、第22回万国外科学会(於ウィーン)、第53回アメリカ外科学会総会(於シカゴ)の3学会に出席すると共に欧米の各大学の視察を行った。

第22回万国外科学会はウィーンのホーフブルグ・コングレスツェントルムで9月3日より9日まで開催された。このコングレンツェントルムは一年中国際会議が開催されていて、空くことは無いと聞き、「会議は踊る」が思いに浮かんだ。

開会式はヨーナス大統領の開会宣言の下に盛大に行なわれた。大統領は大抵の国際会議に出席することであった。オーストリアは観光による外貨獲得にかなりの力を傾けていることが窺えた。オーストリアは歴史と芸術の都ウィーンでもっており、ウィーンを除けば農地と山岳しか残らない平凡な国だと話しあった。

会長はスウェーデン、ルントのサンドブロム教授、ローカルプレジデントはウィーン大学のクンツ名誉教授であった。サンドブロム教授は「外科医の社会に対する責任一社会の外科医に対する責任」と題する開会講演を行った。また、開会式では、ブルックナーのファンファーレ、オーストリア国家、モーツアルトのセレナードなどの演奏もあり、私が初めて出席した大きな国際学会という事でもあるが、日本の学会と異なった祭典式な華麗ともいえる雰囲気を感じた。

学会の主なテーマとしては「胃・十二指腸潰瘍の現況」・「消化管の先天性異常」・「臓器移植」の3つが取り上げられた。私は主として胃・十二指腸潰瘍の方を聞いた。消化性潰瘍のシンポジウムで、急死したシアトルのワシントン州大学のハースキン教授に代わってグリフィス助教授が登壇し、恩師ハースキン教授の遺影をスライドに示した後、ガストリンに関する発表を行った。

座長のニーハス教授はハースキン教授の偉業をたたえ、そして、フロアーから哀悼の意を込めた敬虔な拍手が送られた光景は非常に感動的であった。

万国外科学会に参加して私は、幽門保存胃切除術や分節的胃切除術に関連した迷切と胃横切離による胃運動機能について発表し、4人程の方と意見の交換を行い、貴重な勉強が出来た事を有難く思った。欧米の方々は胃の運動機能について興味を持っている様に思われたが、突っ込んだ研究がない様で物足りなくも感じた。また、欧米では十二指腸潰瘍が多く、胃潰瘍や胃癌が少ない事から、胃の運動機能などに关心が少ないので知れないとも思った。

この学会には石川浩一先生(東大)、鈴木忠彦先生(大阪市大)、砂田輝武先生(岡山大)および田北周平先生(徳島大)らが出席されていた。

ローカル・プレジデント・クンツ名誉教授にお会いでき、その弟子さんのワーンズ先生の案内でウィーン大学を訪れ、ビルロート先生の像や、ビルロート先生が初めて胃切除術を行った時の胃切除標本を見せてもらい、ビルロート先生の偉業に改めて感激を覚えた次第である。ワーンズ先生はビルロート先生は偉く、有名であるので、医者の訪問者が多く、そのお相手で勉強が出来ず困っているところをぼしていた。

ウィーンは二回目であるという鈴木忠彦先生にお会いをして「チャルダッシュ」というハンガリア風の酒場にてジプシーの音楽を聞きワインを傾けたこと、ウィーンの森などを優雅に散歩し風車に乗ったり、また突然行こうといって私を誘って頂き、皇太子が悲恋の心中を遂げた郊外の別荘まで車を走らせ、ヨーロッパ王室の感動のロマンの歴史に触れることが出来たことなど、鈴木先生とウィーンの思い出は忘れることが出来ない。鈴木先生に心からお礼を述べる次第である。

第22回万国外科学会に出席した後は、1977年9月京都で行なわれた第27回と1987年9月シドニーで行なわれた第32回に出席した。今年の第38回のウィーンに行けなかったので、2001年にブリュッセルで開かれる本学会には是非出席したいものと夢を見ている。

万国外科学会に出席した後、アメリカに行きミネソタ大学を訪れた時、出月康夫先生が留学しておられた。出月先生の御尊父様が丁度来ておられ、私共三人が御尊父様にお会いさせて頂き、リリハイ教授の手術を見学する事が出来、大変感激した事が懐かしく思い出される。出月先生に感謝を捧げる次第である。

特別寄稿
サンドール・ジョセフ先生とハンガリー
埼玉医科大学第2外科教授 平山 廉三



万国外科学会のCOMMITTEEには、世界の錚々たる外科の大御所が集いますが、この度、退任されたサンドール・ジョセフ先生とハンガリーについて記してみたいと思います。

ジョセフは出月前会長、萬代先生、比企教授、北島教授と深い親交があり、また、これらの先生方の御力で数回の訪日もし、日本の外科の実力を熟知された“大の日本びいき”の先生であります。

私は、1994年に、金澤暁太郎先生のお力添えを頂戴し、長寿科学振興財団より、ハンガリーに、数ヶ月、派遣して戴きました。当時はベルリンの壁崩壊後間もない頃で、ハンガリーに、長期間滞在する日本の外科医は少ないため、地方新聞に、「日本の外科医が手術する」といった見出しの走る時期でした。

ハンガリーには、4つの医科大学、そして、癌センター（他の色々なセンター）があります。いずれも、古色ながら風格のある建物、その歴史、堂々たる自信に溢れる診療には胸をうつものがあります。

私は、センメルワイス大学、デブレッテン大学、ペーチ大学、国立ガンセンター、ヴェスプレム郡立病院などで老人の癌外科を勉強させて戴きました。

ハンガリーについて、日本では、あまり知られている所が多くないので、はじめに、一筆、触れておきます。

この国は、およそ2000年前、ロシアの地のウラル・アルタイ山脈のどこから西に移動して、（日本の平安時代の頃に）カルパチア山脈に囲まれた現在の肥沃地に定住し、ある時期、ヨーロッパの3分の1を統治しました（その当時の英雄のアツチラ大王、イストバン帝を名前に戴く人が、今でも、実に多い）。

ちなみに、日本もウラル・アルタイ語族に属しております。日本語とマジャール語（=ハンガリー語）は同根です。そこで、名前の呼び方は、ハンガリーと日本は同じで、サンドールは姓、ジョセフは名、例えば、サンドールは山田、ジョセフは太郎にあたります。

その後、オスマントルコに領土の3分の1を奪われ、さらに、ハプスブルクに奪取されてオーストリア・ハンガリー帝国となります。この帝国では、ビルロート先生が活躍され、ハンガリーにも「ビルロート樹」は繁っておりました。

ハンガリーといえば、勿論、近代医療の創始者の一人ともいえるセンメルワイスです。他に、縫合器のペッツ、胃外科のポリアを始め、世界の外科医学をリードした多くの医者がいます。

胃外科のポリアは、センメルワイス大学の外科の先生で、サンドール・ジョセフ先生のオフィスの前の廊下の壁面にポリアの肖像レリーフがあります。サンドール先生の教室はこの流れにあります。

先生の部屋を訪れたとき、ただちに、万国外科学会の参加者リストを本棚から取り出し、互いに出席を確かめ合ったところから交流が始まりました。

この国の外科の学問および体制は、主として、ドイツ流の色彩が濃く、それに、アメリカ式のものが滔々と流れ込んでおります。旧ソ連流のものは影を潜めております。また、胆石多発の国柄ゆえ、内視鏡と鏡視下手術が極めて盛んで、日本の光学機器のみが使用されております。

サンドール・ジョセフ先生は、この国の鏡視下手術を一手に引き受けております。

私にハンガリー外科の実情をみせようとされ、癌センターのベスニヤック教授（癌外科、とくに、乳癌）、デブレッテン大学のバラーチュ教授（甲状腺）、センメルワイス大学のハイーズ教授の3人のハンガリー外科学会会长や、ルカーチ、ホルバート、アッチラ・ナジ先生はじめ、この国の外科指導者の一人一人ずつを人選し、連絡をとり、訪問・滞在の手筈まで調べてくれる親切さでした。

他に、小旅行、別荘、手術、講演会も随分とご一緒に、大変にいたのしい思い出ができました。

気付いてか気づかざるか、ジョセフ先生は、マジャール（=ハンガリー）を代表して、大の日本びいきであります。万国外科学会の学術集会における「主要演題の選択や発表者、座長」についても、日本通、日本びいきを發揮し、ジョセフの紹介だという、事務局も些か親切過ぎました。

ジョセフ先生を介し、我々の教室では、年に数人、互いに医局員を交換し、交歓しあっておりました。

また、北島教授は両国間の外科交流を企図なされ、鋭意、御準備中と承っております。

遠い国マジャールが近くなるものと、その日を鶴首しておりますが、そのためにも、ジョセフは、まだまだ、働いてくれるでしょう。

特別寄稿

WCS開催地での思い出

日本医科大学第1外科

秋丸 琥甫

シドニーでのWCSから参加してきた各開催地での思い出を駆け足で述べさせていただきます。

A：シドニー。夕方に1時間半の時間が出来、買い物組と別れ、久々にウインドサーフィンを、とタクシーで近くの入り江へ。準備なしの白いブリーフでウインドサーフィンを20分ほど楽しました。手頃な潮風を受けて水面をヒタヒタと滑り出したとき、“Red sails in the sunest♪”を口ずさんで超御機嫌。一度沈してたので、格好悪いとは思いつつ濡れたブリーフのままボードを事務所の若い女性に返しました。“また、来てください。”と背中にinstructorと書いてある同クラブの真っ赤なポロシャツを頂戴しました。食事は、皆が珍しいというのでAmerican buffaloのステーキに挑戦。乾いた非常に固い肉で疲れました。Lobsterは日本の伊勢海老とそっくりですが、巨大で刺身は甘み無し。食べられませんでした。夜の町King's crossへ数人で繰り出した帰りのタクシーの中。さんざん日本語で話が盛り上がっていたところ、運転手が“彼等の50%はAIDSだよ”、に皆驚いてシーン。真っ青になっていた某先生。

B：香港。party会場の前に昔の中国の絵から抜け出したような占い師。手を観た後、私が馬に乗ってる絵を描いて、“幸先良し”と言う。その所為か、party最後の出し物であるクジ引きで幸運が訪れました。数人の女性が順番に箱から取り出した番号を司会者が読みはじめます。下3桁になると、自然に大声で彼と一緒に自分の札番号を読みます。司会者と全部同じ。一等賞品は本物のCanada金貨で夢のよう。御礼をと思っても前の占い師はもういませんでした。香港の女医と英国の従事記者とのlove story “慕情”での彼女の追想シーンに出てくる丘と大樹を求め、ケープルカー、バスと徒歩で頂上まで。しかし、地元の人達はLove is a many splendid thingやWilliam Holdenと言ってもチングンカンブン。徒労に終わり、お付き合い戴いた先生方には大変ご迷惑でしたが、香港の町を見下ろせる高台で“マッサイカ”と記念撮影。食事は、同行の先生が日本で手術された香港の女社長さんの案内で、特別メニューの北京ダックの皮と足、中華粥、卵黄が中心に入った仲秋の名月という月餅を食し皆感動。また、超高価なスイス製腕時計を半分以上で御購入の先輩、マカオで儲けられた先輩の話も。この会で求めたWCSのロゴがデザインされたネクタイとTシャツは、今でも愛用しています。

C：リスボン。古城でのpartyは野外で行なわれ、大漁を祈願した歌や踊り、塩味だけの鯛の丸焼きは最高の思い出。石畳の古い街角にある居酒屋ではwineと民族舞踊と演歌fadoを楽しみ、人の心も味覚も日本に似ていると感心。また、毛布1枚持って森のなかで商売する女性の話、大通りで物乞いしていた足の腐った人、直立不動のelephant manは印象的でした。柔道のスター選手であった筑波の轟先生とはここで旧交を温め、毎回WCSでお会いします。

D：アカブルコ。旅行会社の不手際で予定の飛行機に乗れず、Losで一泊してバスで到着。大変な暑さに、何故8月にここであるの？、とつい不満。夜のツアーで、松明持った青年が50mの断崖から海に飛び込む光景は圧巻で、学会のsymbol markでもありました。のちに日本に帰ってから、Pichlmayr先生の訃報には大変びっくりしました。

E：ウィーン。田尻先輩を団長に、私は今年大学生になった娘同伴で参加。大型バスを連ねて行ったワイン村で、main streetを会員が借り切っての大宴会。田舎の肉料理とワインで国際交流が盛んに行なわれ、御名残惜しく帰りが遅れたほど。翌朝の発表を無事終えて、スッキリ。山川先生始め医局の先生方とウィーン大学で著名な医学者の銅像に会い、殊にBillroth先生のひとときわ大きな像の前で“手術が上手になるように”と全員で記念写真。残念だったのは、比企先生曰く“彼の最初の胃切除標本は米国にある。”とのこと。banquetは立派なシャンデリアと立派な絵のある由緒ある宮殿でフルコース。宴だけなわけの頃、娘をSamuel Wells会長（彼女は先生のDuke在任中に生まれた。）御夫妻の席に連れていったところ、20年振りの娘の成長に感激し“amazing, pretty”を連発し額にキス。締め括は生演奏でのワルツ。嫌がる娘が踊ってるポーズを後輩がone shot。でも、彼女は何時になく翌日も上機嫌でした。

学会の話（別の機会に致します。）を省きましたが、世界の外科医と大学や国を越えて手術手技や症例、研究、趣味、家族あるいは人生を語り、感動を分かち合いたいと思いが続く限り、これからも大勢の先輩や後輩と共に参加したい思います。



ウィーン点描



写真1 ウィーンの医学史博物館にあるビルロートが切除に世界で初めて成功した胃の標本（写真左）と剖検で摘出された再建胃標本（写真右）。（通常この博物館では写真撮影は禁止されています。この写真是埼玉医科大学総合医療センター外科の下村一之講師が同館の係員に熱心に依頼して特別に許可され撮影したものです。）



写真2 ビルロートの大きな石像



写真3 万国外科学会総会での出月康夫教授。左はトンプキンズ教授。
右端に、現会長、サミュエル・ウエルズ教授。



写真4 総会で
石川浩一東大名
誉教授に代わって
認証を受ける
比企能樹日本支
部会長。



石川浩一先生名誉会員に推載

出月康夫前会長および比企能樹日本支部会長のご挨拶にありますように、この8月ウィーンの総会で石川浩一東大名誉教授が万国外科学会に対する功績から同会の名誉会員に推載されました。

石川先生、誠におめでとうございます。日本支部にとりましても大変名誉なことであると考えます。今後もこれまで同様に万国外科学会日本支部にご支援くださるようお願い申し上げます。
先生のご略歴を紹介いたします。

- 1915年5月 台湾台北市において 出生
- 1939年3月 東京帝国大学医学部医学科卒業
- 1947年9月 医学博士
- 1954年3月 原子爆弾症調査研究協議会専門委員
- 1956年11月 東京大学医学部助教授
- 1961年7月 米国Massachusetts総合病院留学（IAEA）
- 1963年4月 東京大学医学部教授（外科学第一講座）
- 1965年11月 第2回国際結腸直腸大学外科医学会副会長（東京）
- 1967年9月 第22回万国外科学会出席（Wien）
- 1968年8月 東京大学医学部附属病院長
- 1972年11月 医師国家試験委員長
- 1973年4月 第74回日本外科学会会長
- 1973年9月 第25回万国外科学会出席

- 1974年5月 文部省科学研究費審査委員
- 1975年9月 第26回万国外科学会出席
- 1976年5月 東京大学名誉教授、関東労災病院長
- 1976年3月 第62回日本消化器病学会会長
- 1976年8月 第10回国際脈管学会会長
- 1977年3月 第27回万国外科学会プログラム委員長
- 1977年9月 第27回万国外科学会プログラム委員長
- 1978年4月 勲二等旭日重光賞
- 1979年9月 第28回万国外科学会出席
- 1990年5月 日本外科学会名誉会長
- 1991年4月 関東労災病院名誉会長
- 1995年5月 優和会老人保健施設設設長

特別寄稿

私と万国外科学会、そして最近の大事件

国立病院東京災害医療センター

はらぐちよしくら
原口義座



誌面に載せていただく機会を与えていただいたことを光栄に思うとともに、私もだいぶ年もとってきたのかな、と感じます。

万国外科学会には、1987年のSydneyのThe 32nd World Congress of Surgeryに参加させていただいたのが最初ですので、もう13年目を迎えることになります。そのときの発表演題は、私の専門領域の脾疾患に関するもの（Results of neurotomy on the head of the pancreas for chronic pancreas）でした。学会も活発で楽しく参加できましたが、オーストラリアにも魅せられました。

私の専門は、脾臓外科に加えて、重症術後患者管理・救急疾患の治療もありました。今では救急・集中治療に力点が移ってきております。しかし、死亡率の高い代表的な消化器疾患の一つとして重症急性脾炎があり、現在でもこの疾患の治療に力を入れております。

いっぽう、万国外科学会には、最初の発表後、出月先生、中山先生、藤本先生等多くのご高名な先生方にご無理をいって会員にさせていただきました。以降のほとんどの学会に発表・参加させていただいております。

その間、いろいろな楽しい印象的な思いでが脳裏をよぎりますが、ここではちょっと方向性を変えて話をさせていただきたいと思います。

大変失礼とは思いますが、先生方、次の言葉（外来語）の内、いくつお分かりになりますでしょうか？

「レントゲン」、「キューリー」、「ベクレル」、「クローン」、「ラッド」、「レム」、「グレイ」、「シーベルト（シューベルトではありません）」の8つです。はじめの2つは、よくご存じだと思いますが、後は知らない先生もおられるのではないかと思っております。もしおわかりになんでも、各々の違いはなかなかわかりにくいと思います。これらは、実は放射能に関連する単位でありまして、皆、2つづつ対になっているものです。

今回、この様な話をさせていただいた理由は、我慢してもう少しお読みいただければ、おわかりになると思います。

私は、東京警察病院外科の若林利重先生の下、東京警察病院に外科レジデンント、外科医長（放射線科医長兼任）、救急部長として、延べ二十年以上、勤めさせていただきました。この間、一般外科・消化器外科、救急医学、集中治療学を勉強してきました。

1995年の1月、3月にそれぞれ阪神大震災、東京地下鉄サリン事件との社会を大きく揺るがす大災害が発生しました。私もこれらの災害の治療に直接関与した関係もあって、災害医療に興味をもち（古くは、三菱重工爆破事件、成田空港事件等にも関与しておりますが）、1995年7月に国立病院東京災害医療センターの開設・運営開始とともにこちらに変わりました。

以降、一般外科、救急集中治療の分野だけでなく、災害医療の研究にも力をいれる様になって、4年が経過しております。

ここで、先ほどの放射能に関連する件にもどりますが、実は今年の8月に開催された万国外科学会に、関連があります。ご存知のごとく、Viennaで開催され、私も急性脾炎の演題で発表させていただきました。また発表会場の国際会議場のすぐ裏に高い建物があったことを先生がご記憶にあると思います。（写真①）この建物は、IAEA（国際原子力エネルギー機構）で、この施設が世界のすべての核関連施設の運営の指導にあたる立場にあります。私も災害研究の一環として核災害にも関与しており（たぶん我が国では極めて少ないと思いますが、核災害マニュアルも作成しております、もし興味のおありの先生がございましたら、ご連絡いただければ送付させていただきます）、IAEAにも数人の知人があることもあって、学会の合間に（さばって？）IAEAにおもむき、核災害に関して討論・議論・資料収集をしてきました。

その僅か1ヶ月後に今回の東海村での放射能事故、特に臨界（Criticality）をきたしたレベル4（レベル5？）という世界でもまだ10回前後とされる大事故が発生しました。私も、厚生省の指示のもと、茨城県庁での医療対応の計画作成、その後救護所で2000名近い地域住民の健康診断に携わることになりました。そのときの写真もお示しいたしますが、改めて多くのことを学んだと感じました。（ここでなぜ先ほどの言葉が出てきたかおわかりだと思います。）

その際の住民との話（問診）では、目にもみえず、音も聞こえない核災害の人々に与える大きな心配（Radiophobia）とそれに対応する医療部門の役割的重要性を強く感じたこと、また誠実に説明をすると住民は理解していただき、安心してきてることも実感を持って感じました。このようなことは医の原点とも言えることです。

結論としては、医師に対する信頼を保つ上でも、医師は自分の専門分野はも

ちろん、一定程度は幅広い知識をもっているべきと感じた次第です。

この様なことをお話しすること、また経歴からみて、私は、万国外科学会のメンバーとしては、極めて異色な存在と思っておりますが、これからも諸先生方とご一緒させていただき、日進月歩の外科学に関してご指導いただければありがたいと思っております。

みなさまのご健勝・ご活躍をお祈りして、つたない文章を終わらせていただきます。



写真①：ウイーン学会の正面玄関。右奥に見える白い高い建物がIAEAです。



写真②：東海村の救護所（石川コミュニティーセンター（公民館））、真ん中が私です。右は、放射線影響研究所（広島）の内科の先生、左は茨城県の担当の課長さんです。



写真③：東海村の救護所（石川コミュニティーセンター）内の風景、採血待ちの患者の列、写真②、③は平成11年10月4日（臨界事故の4日後）に撮影。

万国外科学会 第7回日本支部 総会議事録

1999年3月26日（水）午前7:30～8:30
於 博多シーウォーク・ホテル&リゾート3F ボードルーム

1. 庶務報告

1) 会員移動状況（1999年3月23日現在）

総会員数 284名

新入会員数：21名、退会会員数：3名

2) 会費納入状況

193名（72.2%）

2. 広報委員会報告

ISS日本日本支部ニュース8号を発刊した。寄稿して下さった3名の先生にお礼申し上げます。どなたでもご意見がありましたら、投稿して下さい。

3. 1998年度の会計報告

収入合計2,602,884円、支出合計1,378,748円で、当期収支差額1,224,136円は、次

期繰り越し金とした。会費納入の催促をこれまで2回であったが、3回とした。

4. 1999年度予算案

収入合計2,624,136円、支出合計1,510,000円を予定している。

5. 出月康夫前万国外科学会会长より、チューリッヒ理事会の報告

1) 第38回万国外科学会（1999年、ウィーン）に応募された演題数は1521題で、その内の1131題（74%）が採用された。日本からの採用演題数は319題で、約20題が不採用となった。ウィーンの後の本学会の開催地として、2001年はベルギー・ブリュッセル、2003年はタイ・バンコクが予定されている。2005年の南アフリカ・ダーバンに関しては、治安の問題から現在のところ未だ確定ではない。

2) 万国外科学会の総会員数は3690名となった。

3) 名誉会員4名が新たに選ばれた中に、石川浩一東大名誉教授が選ばれた。

6. 比企能樹日本支部会長より、2007年あるいは2009年の日本誘致の提案があり、まず、候補地を選ぶこと、および誘致委員会を早急につくることが決定された。

7. 比企能樹日本支部会長を万国外科学会の常任理事として推薦することが満場一致で決定された。

8. 青木照明教授よりCICDの報告

National Delegateに秋田大学小山研二教授が就任された。

新会員の先生方（1999年1月～9月まで）

医師御芳名 病院名

桑野博行 群馬大学医学部第1外科
関川敬義 東京通信病院第1外科
菊池史郎 北里大学東病院消化器外科
杉谷 崑 癌研究所附属病院頭頸科
佐藤元通 愛媛大学医学部第2外科
新見正則 帝京大学医学部第1外科
井上一知 京都大学再生医科研究所外科
曾和融生 大阪市立総合医療センター

医師御芳名 病院名

貝羽義浩 古川市立病院外科
横江隆夫 群馬大学救急医学
三毛牧夫 雄勝中央病院外科
小寺泰弘 愛知県がんセンター消化器外科
松倉則夫 日本医科大学第1外科
阿部好弘 鹿児島徳洲会病院外科
宮本正章 京都大学再生医科学研究所 再生医学応用研究部門器管形成応用分野
角昭一郎 島根医科大学第1外科



フルツロン® 薬価基準収載
抗悪性腫瘍剤（ドキシフルリジン製剤）
Furtulon® 5'-DFUR
〔国・准〕(英語)フルツロン/カプセル100・カプセル200
※効能・効果、用法・用量、警告・使用上の注意等は、製品添付文書をご覧下さい。
（資料請求先）Roche 日本ロシュ株式会社 〒105 東京都港区芝2-6-1

プロトンポンプ・インヒビター

指定医薬品

タケプロン®
カプセル15・30
(ランソプラゾールカプセル)

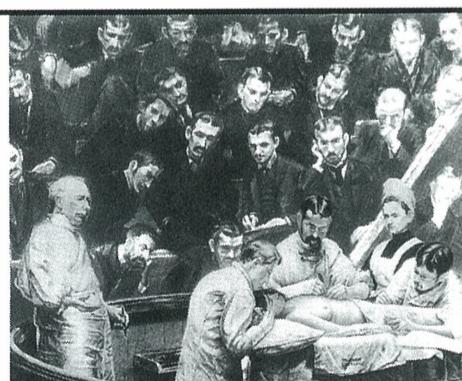
■効能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意および取扱い上の注意等については、添付文書をご参照ください。

■薬価基準：収載

Takepron®

（資料請求先）
武田薬品工業株式会社
〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

多価・酵素阻害剤
ミラクリット注射液
MIRACLID Inj. 25,000/50,000/100,000単位
一般名：ウリナスタチン
（注）注意—医師等の専門知識による使用すること
健保適用
※「効能・効果」「用法・用量」「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。
（資料請求先）
持田製薬株式会社
東京都新宿区四谷1丁目7番地
電話(03)3358-7211(代) 〒160-8515



編集後記

◆ウィーン大学の医師であったTheodor Billrothの名は我々日本の外科医には大変なじみ深いものです。他に胃切除後の再建法はいろいろあるのにそれらを全て忘れていてもBillrothの再建法だけは日本の外科医は必ず知っています。ウィーンには彼の切除した記念すべき胃があることを聞き、それは是非見学したい、という気持ちで私はウィーンへと出かけました。International Surgical Weekの中日の午後暑い市内を地図をたよりにうろうろしたあげく、やっと医学史博物館にたどり着きました。閉館時間であったのにたまたま居合わせた比企能樹先生のグループに入れて頂き、お目当ての標本を見学できました。標本は部屋のまん中にありました。切除胃と剖検胃は、こぎれいなガラスケースに入っており、剖検胃の方は奇妙な形をしていました。また比企先生からBillrothの石像もすぐ近くにあることをお伺いし、これは有難いといそいそとでかけました。慣れぬ土地で、またもさんざん迷い、うろうろした末にようやく大学キャンパス内の木立と芝生に囲まれた石像と対面することができました。あたりには放課後の学生が三々五々寛いでいました。このごろ急に東洋人が大勢でありがたそうに石像を囲んでいるが、一体何故だろうか、などと彼らは思っていたのではないかでしょうか。しかし私たちはBillrothの石像とたくさん記念撮影をして念願かなえたわけです。石像は予想以上に立派なものでした。◆単なる観光旅行も楽しいものですが、学会発表という仕事ついでに時間を作って観光するのも何となく充実感が加わるように感じます。この次は2年後ベルギー・ブラッセルです。是非出かけたく思っています。（村田宣夫）